

小学校社会科デジタル教科書の意義と改善に向けた課題

—動画コンテンツの分析を通して—

鎌田 公寿

要旨：本稿の目的は、小学校社会科デジタル教科書に収録されている動画コンテンツの意義と改善に向けた課題を、「社会とのつながり」を視点に分析し、明らかにすることである。子どもが実社会とのつながりを実感し、自身が社会の一員であることを自覚できるような社会科授業の要素として、「価値の追求」と「社会の形成」が挙げられる。これらの視点から、指導者用デジタル教科書『新しい社会 6 政治・国際編』（東京書籍）の動画コンテンツを分析したところ、対象への関心の高まりや学習意欲の向上にとどまらず、「社会とのつながり」を実感するうえで、一定程度の効果が期待できることがわかった。一方で、とくに「価値の追求」については、願いやニーズの具体、そしてその生成理由に関する内容が手薄であり、問題解決へと向かう態度を形成するうえでは十分なものとはなっていない。これに関する内容を厚くすることが、動画コンテンツの改善に向けた課題といえる。

キーワード：小学校社会科デジタル教科書、動画コンテンツ、社会とのつながり

1. 問題の所在と研究の目的

本稿の目的は、小学校社会科デジタル教科書に収録されている動画コンテンツの意義と改善に向けた課題を、「社会とのつながり」を視点に分析し、明らかにすることである。

小学校社会科授業におけるデジタル教科書の活用方法やその学習効果は、すでにいくつかの先行研究で論じられている。たとえば岩淵は、デジタル教科書教材の学習効果を、(1) 資料の比較が容易である、(2) 動画を提示することができる、(3) グラフの提示が工夫できる、(4) 教科書資料の印刷が容易である、(5) 教科書にアンダーラインを入れて示すことができる、(6) 教科書の内容への関心が高まる、の6点にまとめている¹。また三浦は、デジタル教科書（体験版）を用いて模擬授業を行った大学生に対し、「デジタル教科書（体験版）を使って授業を行う良さ」についてアンケートをとり、その結果から、大学生がその学習効果を実感できるといった、教職課程でデジタル教科書を活用する意義を明らかにしている²。そして松岡らは、デジタル教科書を活用したアクティブ・ラーニング型社会科授業を開発し、具体的な指導のあり方を示している³。このように、デジタル教科書の活用方法やその学習効果を明らかにした研究については、一定の蓄積がある。

一方、コンテンツそのものを分析した研究は、中学校社会科デジタル教科書のコンテン

¹ 岩淵信明（2012）「デジタル教科書を活用した社会科の授業」大谷学会『大谷学報』第92巻第1号、29-53頁。

² 三浦和美（2016）「デジタル教科書（体験版）を用いた小学校社会科授業の構成」東北福祉大学教職課程支援室『教職研究2016』、159-170頁。

³ 松岡靖・小谷穂乃茄（2019）「デジタル教科書を活用したアクティブ・ラーニング型社会科授業の開発」京都女子大学発達教育学部『京都女子大学発達教育学部紀要』第15号、37-46頁。

ツを、「(ア) 紙の教科書と同一内容か、デジタル教科書にのみ含まれているものか、(イ) 紙の教科書とは異なる提示の仕方ができるものか、(ウ) 簡単な操作で、別のコンテンツと比較したり関連付けたりできるものか」という 3 つの観点から分析した五十嵐のもの⁴があるが、これを除き、ほとんど見当たらない。そこで本稿では、動画コンテンツに着目し、子どもが社会とのつながりを実感するうえでの意義と課題について考察する。

本稿は、次の手順をとる。第一に、社会科において育成がめざされる資質・能力を整理し、「社会とのつながり」という、デジタル教科書を分析するための視点を導出する(本稿「2」)。第二に、デジタル教科書に収録されている動画コンテンツの学習効果について、先行研究をもとにまとめる(同「3」)。第三に、指導者用デジタル教科書『新しい社会 6 政治・国際編』(東京書籍)に収録されているいくつかの動画コンテンツを、上記の視点に基づいて分析し、子どもが社会とのかかわりを実感するうえでどのような意義があり、またどのような課題があるのかを明らかにする(同「4」)。

2. 社会科において育成がめざされる資質・能力

2017 年版小学校学習指導要領において、育成すべき資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の 3 つに整理された。このうち、デジタル教科書に収録されている「コンテンツそのものは『知識・技能』の定着に資するものが中心である」⁵。ただし、デジタル教科書の機能によっては、資料の比較・関連づけによって、事象の特色や意義について考察することも可能である⁶。これは「思考力、判断力、表現力等」の育成に一定の効果があるということの意味している。

「学びに向かう力、人間性等」についてはどうか。『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 社会編』によれば、「学びに向かう力、人間性等」とは、「『よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度』と、『多角的な思考や理解を通して』涵養される自覚や愛情などである」⁷。ここでは前者に着目したい。というのも、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会が 2016 年に作成した『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』(以下、中教審答申)において、「主体的に社会の形成に参画しようとする態度[…略…]の育成が不十分である」⁸との指摘がなされているからだ。このことから、子どもが実社会とのつながりを実感し、自身が社会の一員であることを自覚できるような社会科授業の充実が重点課題といえる。

では、現実社会とのつながりを実感できる授業とはいかなるものか。それは、知識伝達による社会システムの理解にとどまらず、現代的課題について考え社会を創ることまでもめざす授業である⁹。そのうえで欠かせないと考えるのが、「価値の追求」と「社会の形

⁴ 五十嵐辰博(2019)「中学校社会科授業におけるデジタル教材活用の視点: デジタル教科書のコンテンツ分析を通して」千葉大学教育学部附属中学校『千葉大学教育学部附属中学校研究紀要』第 49 集、21-29 頁。

⁵ 五十嵐「中学校社会科授業におけるデジタル教材活用の視点」、24 頁。

⁶ 松岡・小谷「デジタル教科書を活用したアクティブ・ラーニング型社会科授業の開発」、41 頁。

⁷ 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 社会編』日本文教出版、24 頁。

⁸ 中教審答申、127 頁。

⁹ 都留覚(2015)「現代的な課題から『社会を考えて創る子どもを育てる』社会科授業」筑波大学附属小学校社会科教育研究部『筑波発 社会を考えて創る子どもを育てる社会科授業: 「知る・わかる」社会科から「考える・創る」社会科へ』東洋館出版社、119-148 頁。なお、現代的課題を扱う理由について

成」である¹⁰。「価値の追求」とは、その社会で暮らす具体的な個人が、どのような願いやニーズをかかえているのかを知ることである。これがあってはじめて、「社会の形成」、つまり、その実現のために何をどうするか考え、行動することが可能になる。別言すれば、他者と協働しながら課題解決の方途をさぐり、提案する、ということである。社会を近くに感じる、社会における自らの有効性を感じるには、たんに思いつきで提案するだけでは十分でない。人びとがもつ切実な願いやニーズをきちんと知ることにもまた、欠かせない。果たしてデジタル教科書は、この達成に寄与するのだろうか。

3. 先行研究にみる動画コンテンツの特徴

デジタル教科書に収録されているコンテンツには、五十嵐の分類にならえば、「教科書に掲載された写真やグラフ、学習課題等が拡大して表示される『拡大資料』、教科書の主題図やグラフ等が拡大表示された上で、表示する内容を選択することができる機能を伴った『レイヤ資料』、教科書の本文や図版等と関連した写真等が表示される『関連資料』、本文の語句の詳しい説明が表示される『語句解説』、教科書本文や図版等と関わる動画やアニメーションが再生される『動画』、表示内容選択や地点変更の機能を伴った『雨温図』、web コンテンツへのリンクや各種コンテンツ（帝国書院版の白地図コンテンツ、日本全図コンテンツ、学習プリント、授業スライド）が表示される『その他』である」¹¹。本稿では、前章で述べたように、社会とのつながりを実感してもらううえで、他のコンテンツと比べて有効なのではないかという見通しから、「動画」に焦点を当てる。

上記の見通しは、先行研究から導くことができる。動画は、静止した写真と比べ、情報量が多い。三浦の論文で紹介されている、デジタル教科書（体験版）を使って模擬授業を行った大学生の感想にも、「教室に持ち込むことが難しい資料や動画などを参照できるため、より具体的な説明や理解を促すことができる」¹²とあるように、これが動画の大きな特徴の1つだといえる。

このような動画の学習効果は、岩渕の論考からさらに具体化することができる。岩渕は、いくつかの実践例に基づき、動画の学習効果を報告している¹³。たとえば、「わたしたちの生活と工業生産 自動車をつくる工業」という単元では、自動車の生産ラインの動画をみた子どもの、「こんなにも大きな鉄の板だったのか」「大きな機械が正確に動いているんだな」「すごく迫力がある」といった発言から、臨場感をもって具体的に理解していることがわかる。また、「情報化した社会とわたしたちの生活 社会を変える情報」という単元では、血液のデータや画像データの交換について医師が説明する動画をみた子どもに、「治療が素早くできるようになっているんだなあ」「患者さんがずいぶん助かるね」といった驚きの

て都留は、答えを児童がもたないこと、現実の問題であること、全力で問題解決に向かえること、の3つを挙げている。

¹⁰ 次を参考にした。梅澤真一（2015）「今求められている『社会を考えて創る子どもを育てる』授業」筑波大学附属小学校社会科教育研究部『筑波発 社会を考えて創る子どもを育てる社会科授業：「知る・わかる」社会科から「考える・創る」社会科へ』東洋館出版社、150頁。

¹¹ 五十嵐「中学校社会科授業におけるデジタル教材活用の視点」、23-24頁。五十嵐が分析しているのは中学校社会科地理的分野の各社のデジタル教科書であるが、本稿が分析対象とする指導者用デジタル教科書『新しい社会6 政治・国際編』（東京書籍）もおおむね同様のコンテンツを有している。

¹² 三浦「デジタル教科書（体験版）を用いた小学校社会科授業の構成」、168頁。

¹³ 岩渕「デジタル教科書を活用した社会科の授業」、48-49頁。

反応や理解の深まりがみられる。そして、「わたしたちの生活と環境 わたしたちの生活と森林」という単位では、川をきれいにする人びとの動画をみてもらうことで、活動の意味のよりよい理解を可能にしている。こうした学習効果を、岩渕は以下のようにまとめている。

印刷された写真ではなく、動画によって動きの中で表情、情報量、広がりなどを臨場感をもって具体的に提示できるため、考える視点が固定化されず思考の幅が広がり、学習意欲が高まる¹⁴。

このように動画は、写真以上の説明が付加されているため、理解を深めるだけでなく、複数の感覚から多くの情報を得ることで、対象への関心や学習意欲が向上するといった効果があるといえる。

4. 「社会とのつながり」からみた動画コンテンツの意義と課題

ただし、これをもって社会とのつながりが意識されたと結論づけることには慎重になるべきである。というのも、本稿「2」にて論じたように、社会とのつながりを意識するには、現代的課題を扱い、「価値の追求」「社会の形成」を中心とする学習プロセスによってそれを解決することが求められるからである。これはもちろん、デジタル教科書だけで達成できるものではない。しかしとはいえ、デジタル教科書がこれからの社会科教育にとっていかなる意義をもつのかを論じるうえで、上述の視点からの分析は避けて通れないはずである。そこで本章では、「価値の追求」「社会の形成」を視점에、指導者用デジタル教科書『新しい社会 6 政治・国際編』（東京書籍）に収録されている動画コンテンツを分析し、その意義と課題について考察する。

分析対象とする動画の選定基準は、それが現代的課題を扱う単元に位置づけられていることである。地域、日本、そして世界には多くの課題が山積しているが、ここでは2017年版小学校学習指導要領で見直された内容に絞ることにしたい。中教審答申には、「社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する力を養うためには、[…略…] 将来につながる現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直しを図ることが必要である」¹⁵ことから、「小学校社会科においては、世界の国々との関わりや政治の働きへの関心を高めるよう教育内容を見直すとともに、自然災害時における地方公共団体の働きや地域の人々の工夫・努力等に関する指導の充実、少子高齢化等による地域社会の変化や情報化に伴う生活や産業の変化に関する教育内容を見直すなどの改善を行う」¹⁶、とある。つまり、ここで「現代的」とされているのが、「世界の国々との関わり」「政治の働き」「自然災害」「少子高齢化」「情報化」の5つなのである。このうち、「情報化」を除く4つに関する内容が、第6学年の「政治」単元と「国際」単元に位置づけられている。そのなかでもとくに、「子育て支援の願いを実現する政治」「世界の未来と日本の役割」¹⁷の2つの小単元において、「課題」としての扱いが顕著である。そこで以下では、この2つの小単元に収録されている動画コ

¹⁴ 岩渕「デジタル教科書を活用した社会科の授業」、50頁。

¹⁵ 中教審答申、132頁。

¹⁶ 中教審答申、132頁。

¹⁷ この小単元名は、分析対象とする東京書籍のデジタル教科書にならっている。

コンテンツを例にとり、分析していく。

(1) 「子育て支援の願いを実現する政治」

まずは小単元「子育て支援の願いを実現する政治」について分析していく。この小単元には、以下の【表1】の動画コンテンツが収録されている。

【表1】「子育て支援の願いを実現する政治」動画コンテンツ一覧

①川口市の児童センター「あすばる」(説明)
②事務室と受付(説明+利用者の声)
③遊戯室で行われる布遊びのイベント(説明)
④お父さんを対象にした、赤ちゃんとのふれあいイベントの様子(説明+利用者の声)
⑤あすばるの増子さんの話(説明+職員の声)
⑥乳幼児室の様子(説明+利用者の声)
⑦子育てに関する学習会(説明+利用者の声)
⑧市役所の近藤さんの話(説明+職員の声)

(※名称は、デジタル教科書のツールである「収録コンテンツ一覧」にならった。()内は、内容についての簡単な説明である。番号は筆者が便宜上付した。以上のことは、のちに提示する【表2】についても同様。)

このようにみると、すべての動画が説明をベースに構成されていることがわかる。これは、本稿「3」でみたように、事象に対する理解を深めるという学習効果をねらったのことだと解釈できる。では、「価値の追求」「社会の形成」という視点からみたとき、どのような傾向がみえてくるだろうか。

まず、「価値の追求」について。再度確認するが、「価値の追求」とは、その社会で暮らす具体的な個人が、どのような願いやニーズをかかえているのかを知ることである。動画の内容でいえば、「利用者の声」がそれに寄与する。この小単元では、その名称によく表れているように、「子育て支援の願い」が軸になるため、動画にもそれが多く盛り込まれている。たとえば、②「事務室と受付」では、「家の近くにあるので困ったときにすぐ利用できる」「イベントでは同じ年ごろの赤ちゃんをもつ親が集まる・イベントがきっかけで子育てについて話せる友達ができた」「雨でも(屋内なので)安心して遊べる・同じ年ごろの子どもがいるので子どもも安心して遊べる」「先生などと話すことで気分転換になる」といった利用者の声が収められている¹⁸。④「お父さんを対象にした、赤ちゃんとのふれあいイベントの様子」(画像)では、「(イベントに参加すると)地域の方と交流できる・(赤ちゃんとコミュニケーションを図る)ベビーサインをはじめで知り非常に楽しかった」「子どもが大きくなると、だっこするのが力仕事になる・お父さんに懐いてくれれば(だっこができるので)



¹⁸ 動画の字幕をもとに概要をまとめた。なお、漢字や平仮名については、一部表記を変更している。以下同様。



お母さんの肉体的な負担を軽くできる」といった声を聞くことができる。その他にも、⑥「乳幼児室の様子」では、「離乳食を食べないことや友達とけんかしてしまうことなどを相談していた」「子育て支援コーディネーターに『大丈夫』といってもらえると安心できる」、⑦「子育てに関する学習会」(画像)では、「子どもの食事について困っていたが、(学習会で教わったことが) 参考になった」「同じくらいの

の年ごろの子どもをもつ母親と友達になり(育児のことも)相談できた」など、願いやニーズに関する当事者の実際の声が多く登場する構成となっている。

次に、「社会の形成」について。こちらも再度確認するが、「社会の形成」とは、願いやニーズの実現のために、何をどうするか考え、行動することである。その足がかりとなるのが、「社会の形成」にすでに取り組んでいる「職員の声」である。これが収められているのは、⑤「あすばるの増子さんの話」と⑧「市役所の近藤さんの話」(画像)の2つである。これらの動画では、「あすばる」や市役所の取り組みが社会に対しいかなる意義を有するかが説明されている。子どもはそれに触れることで、「増子さん」や「近藤さん」をロールモデルとし、「社会の形成」へのイメージをもつことができる。具体的には、⑧「市役所の近藤さんの話」でいえば、「子どもや親が気軽に遊べる場所、悩みを相談したり情報交換をしたりできる場所がほしいという声があった・このような市民の声を『あすばる』の計画に反映させた」との語りが、イメージづくりに好影響を与えるだろう。



以上みてきたように、この小単元の動画コンテンツには、人びとの願いやニーズとその実現に携わる人びとがバランスよく登場する。ゆえに、子どもが「価値を追求」し、「社会の形成」のビジョンを共有する、という一連のプロセスを用意するのに効果があるといえる。ただし、その背景となる社会状況についてはほとんど触れられていない。とくに、ニーズは欠乏状態から発生するが、何が欠乏しているのか、その状態がいかに深刻なものを動画から知ることはほとんど不可能である。したがって、子どもが子育てに関わる「課題」を捉えることは難しい。「社会とのつながり」と課題解決の結びつきを念頭に置き、内容を構成しているとはいいがたいのである。

(2) 「世界の未来と日本の役割」

続いて、小単元「世界の未来と日本の役割」について分析していく。この小単元には、以下の【表2】の動画コンテンツが収録されている。

【表2】「世界の未来と日本の役割」動画コンテンツ一覧

① 国際連合の本部（説明）
② 国連の平和維持活動に参加する自衛隊（説明）
③ ユニセフについて調べたこと（説明）
④ ツバルの首都・フナフティの様子（説明＋そこに暮らす人びとの様子）
⑤ 大気のごれが広がるペキンの様子（説明＋そこに暮らす人びとの様子）
⑥ 青年海外協力隊の活動（説明）
⑦ 日本のODA（説明）
⑧ 洪水の緊急支援で医療活動を行う「AMDA」の人々 1（説明＋職員の声）
⑨ 洪水の緊急支援で医療活動を行う「AMDA」の人々 2（職員の声）

動画の内容は、小单元「子育て支援の願いを実現する政治」と同様、説明をベースに構成されている。



ではまず、「価値の追求」についてはどうだろうか。前節で分析した小单元と比べて顕著なのは、窮状に立たされている人びとの様子や声がほとんど盛り込まれていない、ということである。つまり、ニーズのありようを伝えることができていない。ニーズをもつ人びとの視点が具体的な問題とともにフォーカスされるのは、④「ツバルの首都・フナフティの様子」（画像）のみである（ただし「声」はない）。⑤「大気のごれが広がるペキンの様子」も、具体的な問題の被害状況を説明したものではあるが、誰がどのような被害を受けているのかについては触れられていない。その他の動画については、のちに分析するように、「支援者」側の視点からつくられており、「被支援者」の様子もわずかに登場するが、それについての説明はない。授業者のほうで補足する、という方法もあるが、それが難しいからこそその動画ではないか、と考えることもできよう。世界的な諸問題は、子育てとは異なり、子どもにとっては遠くの世界の出来事である。ならばなおのこと、その実際を伝える動画を制作するべきではないか。世界的な諸問題の場合、当事者の声を調査することも含め、制作には広い意味でのコストがかかるのかもしれない。しかし、そうではあっても、子どもにもたらすものの大きさからすれば、制作に向けた努力を続ける意義があると考えられる。

次に、「社会の形成」に関してはどうか。これについては小单元名にある「日本の役割」が多く取り上げられている。動画に登場する団体や個人は、社会の形成者としてのロールモデルになりうる。とくに、⑨「洪水の緊急支援で医療活動を行う『AMDA』の人々 2」（画像）には、実際に活動している人の声が収録されているが、「（もともと看護師になりたくて）看護と英語を学んだの

次に、「社会の形成」に関してはどうか。これについては小单元名にある「日本の役割」が多く取り上げられている。動画に登場する団体や個人は、社会の形成者としてのロールモデルになりうる。とくに、⑨「洪水の緊急支援で医療活動を行う『AMDA』の人々 2」（画像）には、実際に活動している人の声が収録されているが、「（もともと看護師になりたくて）看護と英語を学んだの



で両方を生かして人に貢献できる仕事を探した」「海外で印象に残っていることはシャワーからお湯ではなく水が出たこと」「海外へ行くと日本での安全な暮らしがとても幸せなことだとわかる」「(世界の) いろいろなところに目を向けてほしい」というように、活動動機からそこで得た経験、子どもに向けたメッセージに至るまで、幅広く、具体的な内容が盛り込まれている。しかしながら、繰り返しになるが、これは「価値の追求」があっこそ意味を増すものである。「日本の役割」のみを強調しても、肝心の問題とは何なのか、そこに広がっている惨状とはいかなるものなのかが不明瞭なままでは、「社会の形成」は達成されない。前節で分析した小単元と比べても、問題解決への提案をつうじた「社会とのつながり」の実感とは大きな距離がある。

以上、2つの小単元における動画コンテンツを分析した。動画は、「学びに向かう力、人間性等」のうち、先行研究で指摘されている、対象への関心の高まりや学習意欲の向上にとどまらず、「社会とのつながり」を実感するうえで、一定程度の効果が期待できることがわかった。一方で、とくに「価値の追求」については、願いやニーズの具体、そしてその生成理由に関する内容が手薄であり、問題解決へと向かう態度を形成するうえでは十分なものとはなっていない。これに関する内容を厚くすることが、動画コンテンツの改善に向けた課題といえよう。

5. デジタル教科書改善の方向性

以上本稿では、デジタル教科書の動画コンテンツに着目し、「社会とのつながり」を実感するうえでの意義と課題を明らかにした。最後に、今後のデジタル教科書改善の方向性について考えてみたい。

「授業の組み立てが主であって、デジタル教科書は従の関係にある」¹⁹といわれる。この考え方に対して、筆者も異論はない。デジタル教科書に何もかもを詰め込み、パッケージ化することは、授業づくりにとって重要な創造性をかぎりなく小さくしてしまうという点で、筆者は支持しない。けれども、「従」だからといって、授業者の意図、そしてその前提となる社会科がめざすところとの乖離を埋めなくてもよいということにはならない。むしろ「従」であればこそ、それにできるかぎり対応したコンテンツの選定・制作が求められる。しかしながら今回、動画コンテンツを分析してみたところ、デジタル教科書と社会科の理念、とくに態度目標との隔たりが大きいことがわかった。したがって、今後コンテンツの改善を図るうえで重要なのは、その量をやみくもに増やすのではなく、まずは社会科の理念に基づきその方向性を見定めることである。それなしに、コンテンツの質的向上は実現しえない。そのためにも、教科書会社と社会科教育研究がこの課題を共有し、共同でそれに取り組むことが、一層求められよう。

付記

本稿は、令和2年度「常葉大学 授業改善等に係る研究助成」(代表：井上亘)を受けて行われた研究成果の一部である。

¹⁹ 稲垣忠「デジタル教科書を活用する：『効果的に使う』とは、どういうことか」(東京書籍ウェブサイト：<https://www.tokyo-shoseki.co.jp/ict/support/detail-02-inagaki>)、2021年8月30日閲覧。